

演題番号：B7

ウルソデオキシコール酸製剤の定期投与が黒毛和種去勢牛の血液性状および産肉性に及ぼす影響

○正木達規, 大崎 茂, 吉田恵実

兵庫県農技総セ畜技セ

1. はじめに：ウルソデオキシコール酸（以下ウルソ）には、肝血流量増加作用による肝臓の代謝機能向上、リパーゼの活性化による脂肪の消化促進などの効用がある。そこで、濃厚飼料の増給および血中ビタミンA濃度の低下により肝臓への負荷が高まる肥育前期から中期におけるウルソ製剤の定期投与が黒毛和種去勢牛の血液性状および産肉性に及ぼす影響を検討した。

2. 材料および方法：供試牛は、12ヵ月齢の黒毛和種去勢牛20頭とした。肥育前期は12～14ヵ月齢、中期は15～22ヵ月齢、後期は23～30ヵ月齢とした。ウルソ（ウルソ[®] - 5%）を投与しない対照区（n = 6）、ウルソの定期投与期間を肥育前期および中期とするウルソ前中期区（n = 7）、または肥育中期とするウルソ中期区（n = 7）を設定した。ウルソの定期投与期間中は、2週間ごとにウルソとして日量2.5gを3日間連続経口投与した。濃厚飼料は18ヵ月齢以降飽食給与とし、粗飼料は稲わらを用い全期間制限給与した。飼料摂取量は毎日、体重は毎月測定した。2ヵ月間隔で採血し、アスパラギン酸アミノトランスフェラーゼ（AST）、γグルタミルトランスフェラーゼ（GGT）を測定した。供試牛は30ヵ月齢でと畜した。

3. 結果：肥育中期において、ウルソ中期区は対照区に比べ、濃厚飼料摂取量が多く（ $p < 0.05$ ）、一日平均増体量が高くなった（ $p < 0.05$ ）。平均体重は18ヵ月齢以降、ウルソ前中期区およびウルソ中期区が対照区より常に高く推移した。血漿中のASTおよびGGT活性値は、処理区間で差が認められなかった。枝肉格付形質では、ウルソ中期区は対照区に比べ、バラ厚で1cm（ $p < 0.05$ ）、ロース芯面積で10cm²大きく（ $p = 0.069$ ）なった。屠畜時に、肥育中期区で鋸屑肝と肝富脈斑が各1頭みられた他は、肝疾患を疑う所見はなかった。

4. 考察および結語：本研究におけるウルソの定期給与では、血中の肝機能指標へ及ぼす影響および内臓所見における肝炎の発生減はみられないことから、肝臓への負荷軽減や肝炎予防としての投与効果は認められなかった。一方、飼料摂取量の増加を介した肥育中期での発育向上が認められ、肥育全期間での増体をより高めるためには、肥育後期を含めた飽食給与期間中でのウルソの定期投与をさらに検討する必要がある。